

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 50

September, 2017

関西大学ニュースレター

発行日：2017年(平成29年)9月15日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>

● 関西大学たかつきアイスアリーナから、世界の頂へ
平昌オリンピックピックへ、
羽ばたけ氷上の妖精たち

■ 対談 宮原知子 関西大学文学部2年次生 / 本田真凜 関西大学高等部1年生

● 五輪という最高の舞台を目指す宮原さん、本田さんへ
■ インタビュー 織田信成 関西大学体育会アイススケート部監督

■ リーダーズ・ナウ ー9
在学学生— 商学部 3年次生 飯隈 菜津美 さん
化学生命工学部 4年次生 岡島 浩平 さん
卒業生— 株式会社アイ・キューブ 代表取締役
広野 郁子 さん

■ 研究最前線
比較憲法、南アジア法に関する研究
インド憲法の動態から国の歩みを追う —11
政策創造学部 — 浅野 宜之 教授
メディア・アートの研究
視覚と聴覚が相互に作用する新しい表現 —13
総合情報学部 — 井浦 崇 准教授

■ トピックス [学内情報] —15
教育後援会が創立70周年記念式典、アイスショーを開催
次世代を担うスケーターが、華麗な演技を披露 ほか

■ 社会貢献・連携事業 —17
関西大学がにわ大阪研究センター主催
「『ガラス乾板』に記録された住吉大社の風景」ほか

■ 関大ニュース —19
卒業生の和田伸也さんが世界パラ陸上競技選手権大会
陸上男子5000mで銅メダルの快挙 ほか

SATOKO MIYAHARA

羽ばたけ
氷上の妖精たち宮原 知子さん
●関西大学文学部2年次生平昌オリンピックへ、
関西大学たかつきアイスアリーナから、世界の頂へ本田 真凜さん
●関西大学高等部1年生

2018年2月9日から、韓国・平昌で開催される第23回冬季オリンピック出場に向けて、女子スケーター達の熱い氷上の戦いが始まっている。フィギュアスケート女子シングルの日本の出場枠は前回より1つ減って2。この限られた枠を狙って、実力選手たちがひしめく。

関西大学からも、日本スケート連盟特別強化選手に指定された2人の選手が、有力候補として期待を集めている。全日本フィギュアスケート選手権3連覇中、パーソナルベストで日本最高点の218.33を持つ女王、宮原知子さんと、2016年世界ジュニアフィギュアスケート選手権金メダリストで今シーズンからシニアクラスに挑戦す

ることになった本田真凜さんだ。

関西大学は、佐藤信夫さん(1960年スコーパー、1964年インスブルック)、佐藤(大川)久美子さん(1964年インスブルック、1968年グルノーブル)、高橋大輔さん(2010年バンクーバー銅メダル、2006年トリノ、2014年ソチ)、織田信成さん(2010年バンクーバー)、町田樹さん(2014年ソチ)など、多くのオリンピックスケーターを輩出してきた。

これらの偉大な先輩達に続く、新しいオリンピックを目指す2人が、五輪出場への思いや決意を語った。

◆個性を生かしたプログラムで挑む五輪シーズン

—今シーズンの目標は、2人とももちろんオリンピック出場ですよ。

宮原・本田 はい。

—新シーズンのスタートはどうか？ 宮原さんは左股関節の疲労骨折からの回復の途上だとは思いますが。

宮原 けがの状態は回復していて、順調です。とにかく、体調に気を付けながら感覚を取り戻しているところです。

本田 私はシーズンオフにアイスショーでフリーを何度か滑って、自信をつけることができました。今のところは、手応えを感じています。今シーズンはシニアデビューなので、「楽しむ」をテーマに、試合も思いっきり楽しんでできればいいかなと思っています。

—今シーズンのフリー、ショートプログラムの音楽は決まりましたか？

本田 フリーは「トゥーランドット」を選曲しました。ジャンプや構成は自分の調子と合わせながら、いろいろと試しています。毎日練習しても楽しいプログラムに仕上がっているので、今は早く試合がしたいなと思っています。

—トゥーランドットといえば、荒川静香さんがトリノオリンピックで金メダルをとった演技を思い出す人が多いと思います。

本田 トゥーランドットは、濱田先生が決めてくれた曲です。荒川さんのことを特に意識して今回の曲を選んだわけではありませんが、荒川さんは以前からすごく憧れていたスケーターです。

実はショートの曲はまだ決定していません。強い感じの表現でリズムを刻むタンゴなどいくつか滑っていますが、最近になって、自分の中で衝撃的な曲に出会いました。振り付けはまだですが、伝え方やストーリー展開を自分で設定できるような曲です。決まった動きを求められるような曲ではないので、滑る時の気持ちが表情や手の動きなどに自然と出せるような素敵なプログラムになればうれしいです。

どの曲になっても、自分には難易度の高いステップにも挑戦す

ることになり、すごく難しいのですが、その分、毎日ここが良くなったと思えるような練習ができているように感じています。

宮原 私はフリーが「蝶々夫人」、ショートは映画「SAYURI」の曲です。

—どちらも、日本が舞台の物語の曲ですね。

宮原 以前、ミス・サイゴンで演技した時に、アジア系の曲がぴったりだという意見が多く、私も滑りやすかったので、今回は日本っぽく、アジアっぽくいくことにしました。

—蝶々夫人は、浅田真央さんをはじめ、いろいろな選手が滑ってきた曲ですね。

宮原 多くの方々がその物語を知っていて、たくさんの選手が演技している有名な曲なので、しっかりと滑り込むことが必要だと思っています。自分らしい「宮原知子の蝶々夫人」と言われるような演技ができるよう、頑張りたいと思っています。

—宮原さんは、本当に努力の人というイメージがあるので、けがをおしても、練習してしまおうとちょっと心配です。

宮原 その辺りを自分でコントロールできなくて、またけがをしたら意味がないので、必要な時に練習に集中して、リラックスする時にはしっかり休息できるようにしようと思っています。

◆2人は正反対!? 練習方法、試合への入り方

—ところで、いつからお互いを知っているのですか？ ノービスの頃ですか？

宮原 もっと小さな時から知っています。年は4つ違いますが、真凜が多分小学校1年生ぐらいの頃、京都のリンクで、同じ濱田コーチの下で練習するようになってから仲良くなりました。

—1年生だと、身長も1mちょっとかな？

宮原 小さかったです。

本田 その頃は小さかったと思います。

宮原 それが、中学に入ってから急にすらすらと伸びて、あっという間に抜かれてしまって。

■対談



宮原 知子(みやはら さとこ)
1998年3月京都生まれ。関西大学文学部2年次生。関西大学体育会アイススケート部所属。日本スケート連盟特別強化選手。2016年関西大学高等部卒。主な成績は、14年、15年、16年全日本フィギュアスケート選手権優勝。15年世界フィギュアスケート選手権2位。15年、16年グランプリファイナル2位、四大洲フィギュアスケート選手権2016優勝など。

シニアでたくさん戦ってきた経験を演技に出せればいいなと思っています。そして、最後はオリンピックに出場したい。

本田 さっとなは試合はもちろん、練習から安定感がすごいですよ。そこが、今の自分に一番足りないことだと思っています。
宮原 私から見ると、真凜は難しいジャンプもほわんと、軽く跳んでしまうので、そういうところは点数も上がりやすいと思うし、すごいなと思います。そして、気負わずに試合に入っていくところがうらやましいです。私は試合の時は自分のことで精いっぱい、正直言うと他の選手のことはあんまり見てないんですが、真凜は試合の時もいつも楽しそうで、見習いたいと思っています。

◆初めての氷に乗らない生活。リハビリ中にしたこと

—宮原さんは昨シーズン、全日本選手権3連覇を果たした後、けがのために四大洲選手権大会、世界選手権大会と欠場せざるを得なかったのは、とても残念だったと思います。けがが分かってからは、どういう風に過ごしていましたか？

宮原 1月のアイスショーが終わってから、2週間ぐらいリハビリだけの期間を作りました。それからどこまで痛みが無くなるかわからないけれど、世界選手権に向けて頑張ってみようと思って、徐々に強度を上げていきました。でも結局、世界選手権の2週間

ことはほとんどありませんでした。長い間練習できないのは初めての経験でしたが、リハビリの間は時間に余裕ができたので、映画を見たり、音楽をいろいろ聴いたり、衣装のデザインを考えたり、そういうことをしていました。

—何か新しい発見はありましたか？

宮原 フリーやショートの音楽を決める時に、その曲が使われた映画を見て「こっちがいいな」と感じる事ができました。

衣装デザインも初めて自分でアイデアを出してみました。試合用ではなく、ショーで着るものです。絵を描いたり、物を作ったり手仕事は好きなんですけど、なかなかそういうことまでする余裕がなくて。時間も技術も無いから、今は無理なんですけど、自分で衣装を縫ってみたいと思ったりもします。

◆互いに刺激し合える、良い環境での練習

—たかつきアイスアリーナで練習するスケーターには、今年からシニアに上がって、強化選手Aにも選ばれている白岩優奈さん(関西大学KFSC)もいます。宮原さん、本田さん、白岩さんなど、オリンピック日本代表の少ない枠を争う競争相手が身近で練習し

オリンピックに出ている自分と想像したことはありません。今は夢から目標に変わりつつあります。



本田 真凜(ほんだ まりん)
2001年8月京都生まれ。関西大学高等部1年生。関西大学中等部・高等部アイススケート部所属。日本スケート連盟特別強化選手。17年関西大学中等部卒。主な成績に16年世界ジュニアフィギュアスケート選手権優勝。17年世界ジュニアフィギュアスケート選手権2位。15年ジュニアグランプリファイナル3位など。



—2人にとって、お互いはどんな存在ですか？

宮原 真凜は、とにかく面白い。チーム全体のムードメーカー的な存在ですね。

本田 私にとっては、さっとな(宮原さんの愛称)はお手本のような先輩。練習熱心なんて言葉を超えるくらいまじめに、熱心に練習しています。私は練習があまり好きじゃないから、見習わないといけないって、いつも思っています。私だけでなく、チームの中でも皆がそう思っていると思います。

宮原 自分の中では普通に練習しているつもりなので、「こんなに努力したんだから」といったことは全く思っていないです。ただ、練習でうまくできなくても本番では決めるといのは私には絶対無理です。練習でちゃんとしていないと、試合でうまくできないタイプなんです。だから、しんどい時でもジャンプをきっちり入れられるようにしようとか、いつも本番のことを考えながら練習しています。

ほど前に、また違和感が出てきました。本当はもっと練習量を上げたかったのですが、痛みで躊躇してしまうところもあって、このままではたとえ世界選手権まで頑張ったとしても、いい演技はできないかと、濱田先生たちとも相談して、世界選手権も諦めることにしました。3月の終わりぐらいから、東京の国立スポーツ科学センターで、4月末まで、リハビリだけに集中しました。約1カ月東京に泊まって、週末だけこっちに帰ってきていました。滑り始めたのは、5月に入ってからです。

リハビリの1カ月の間は、氷に全く乗っていませんでした。気分が変わるかなと思って、髪をバサリ切ったりしました。

—1カ月も氷上練習をしなかったのは、本格的にスケートを始めてから初めてのことでないですか？

宮原 そうなんです。小学2年生ぐらいかな、本格的に練習をするようになったのは。それから、休みの日に友達と遊びに行ったりすることは、たまにありましたが、何日間もゆっくり過ごす

ているというのは、どのような感じですか？

宮原 自分の足りないところが見えたり、「もっと頑張らない」と、すごく刺激し合える良い環境です。ライバル心みたいなパチパチ感は全然ないです。皆のびのび滑っているし、リンクの外では、仲良く、わいわいおしゃべりします。雰囲気はいいんじゃないかと私は思っています。

本田 毎日楽しく練習できているので、私もすごく良い環境で取り組んでいると思います。

—そのいい雰囲気が、よい結果を生み出すことにつながっていきそうですね。

◆最終目標は、平昌。焦点は全日本選手権

—今シーズンの初戦はいつですか？

本田 9月13日から始まるチャレンジャーシリーズのUSインターナショナルクラシックです。シニアの世界で、自分がどういう演

技ができて、どんな結果になるのかワクワクしています。

宮原 私はグランプリシリーズになります。

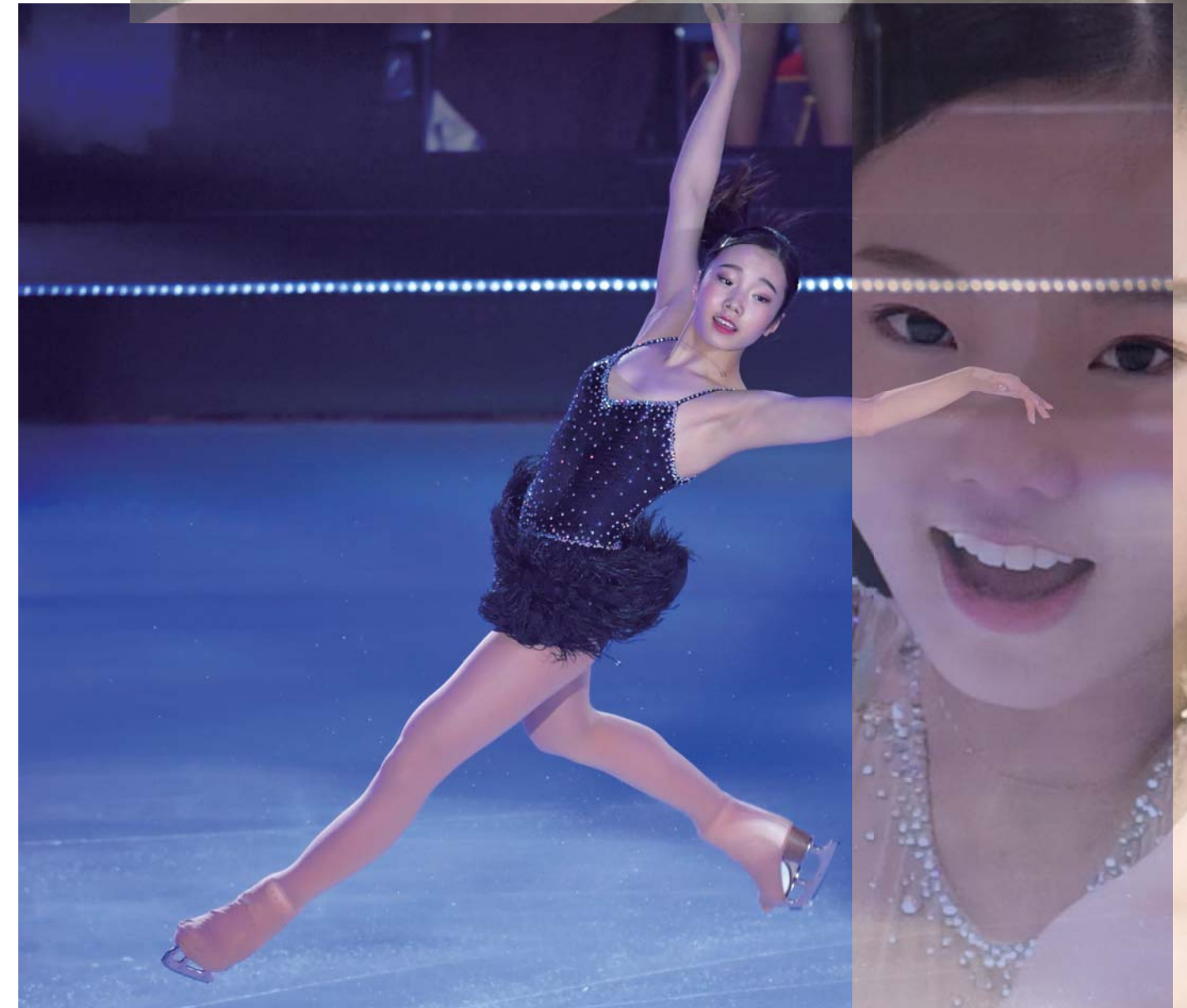
—最後に改めて、今シーズンの抱負をお願いします。

本田 オリンピックで金メダルをとるといのがスケートを始めた頃からの夢で、オリンピックに出ている自分を想像したことはありません。今は夢から目標に変わりつつあります。まずはオリンピック出場を目指して、いい順位を目標に設定して、達成していきたいと思っています。

宮原 今シーズンは今までと違って、精神的にも、身体的にも難しいシーズンになるかもしれないけれど、シニアでたくさん戦ってきた経験を演技に出せればいいなと思っています。そして、最後はオリンピックに出場したい。その最終目標に向けて、代表の最終選考会となる12月の全日本選手権にしっかり焦点を合わせて調整して、楽しんで試合に出られたらいいと思います。

Satoko

Miyahara



Marin Honda

Nobunari Oda



● 五輪という最高の舞台を目指す宮原さん、本田さんへ

きっと、大丈夫。
緊張感を力に変えて、
のびのびと。

織田 信成さん・関西大学体育会アイススケート部監督

織田 信成(おだのぶなり)
2011年3月関西大学文学部卒業。15年3月同大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了。在学時は体育会アイススケート部に所属し、フィギュアスケート選手(男子シングル)として活躍。主な成績に、10年バンクーバーオリンピック7位、09・10年グランプリファイナル2位、08年全日本選手権優勝、06年四大陸選手権優勝など。プロスケーター、タレントとしての活動と並行して、17年度より関西大学体育会アイススケート部監督に就任し、学生の指導にあたっている。

彼女ほど自分自身の努力、考え方で苦難を乗り越えてきた選手は見たことがありません。それぐらい、日頃から、強い精神力を持っている選手だと思います。その精神力でぜひ、これから訪れる不安を打ち消してほしいと思います。

本田さんにとって、今シーズンはシニア1年目で、彼女にとっては初々しいデビューの年です。ずっとスケートをやってきて、初々しいなんて言われても、彼女はびんと来ないかも知れませんが、見ている人は、シニアで見る本田さんにすごく新鮮味を感じると思います。そういうフレッシュさ、彼女の生き生きとした部分を前面に押し出して、ちょっとミスがあっても、笑顔でカバーするほどの勢いで頑張してほしい。

彼女は注目されればされるほど力を発揮します。ここ一番、ここだという時に決められる選手だと思います。常にいい演技をしたいというのは、どの選手も同じですが、ここ一番で決める彼女の爆発力をためて、ためて、ためて、ここぞという時、それは全日本選手権になると思いますが、爆発させてほしいと思います。

◆緊張から解き放たれて、ゾーンへ

スケーターはどんな状況でも緊張感をうまく力に変え、緊張感から解き放たれて、ワンステージ上に精神的に行く、いわゆるゾーンの状態に入ることができるものです。

そういう状態のときに、非常にいい演技ができます。2人にはオリンピックのことを考え過ぎず、萎縮せずに、のびのびとやってほしいというのが、私の思いです。そして、今のところ、2人はとてものびのびできていると思います。

◆宮原さん:経験と抜群の安定感
本田さん:力みのないスケートが強み

宮原さんはジャンプの安定感に加えて、年々表現力もつき、美しいだけではなく、その中に独創性が発揮されるようになってきました。シニアの選手として長らく、日本を引っ張り、数々の大舞台で、常に素敵な演技を見せてくれています。「彼女だったらきっと大丈夫」という安心感、それが、彼女の強みだと思います。経験豊富で、何がなかを考えて、正解を自分ではじき出せるのが宮原さんだと思います。

本田さんとはいうと、スケートは氷の上に立つのでどうしても、遠心力やバランスを取るために体に力が入ってしまいがちですが、彼女の場合は、そういう力みが一切なく、自然な、エフォートレスなスケートができているのが素晴らしい点です。2016年世界ジュニアで金メダルを獲得し、昨シーズンは追いかける難しさを経験した上で、今シーズン、シニアに上がって追いかける立場になれるというのは、精神的には良いことじゃないでしょうか。彼女は笑顔で滑っている時が、一番スピードがあって、勢いがあります。彼女の良さである天真爛漫さを、このオリンピックシーズンで見せることができれば、かなりオリンピック出場という可能性が高くなるのではないかと考えています。

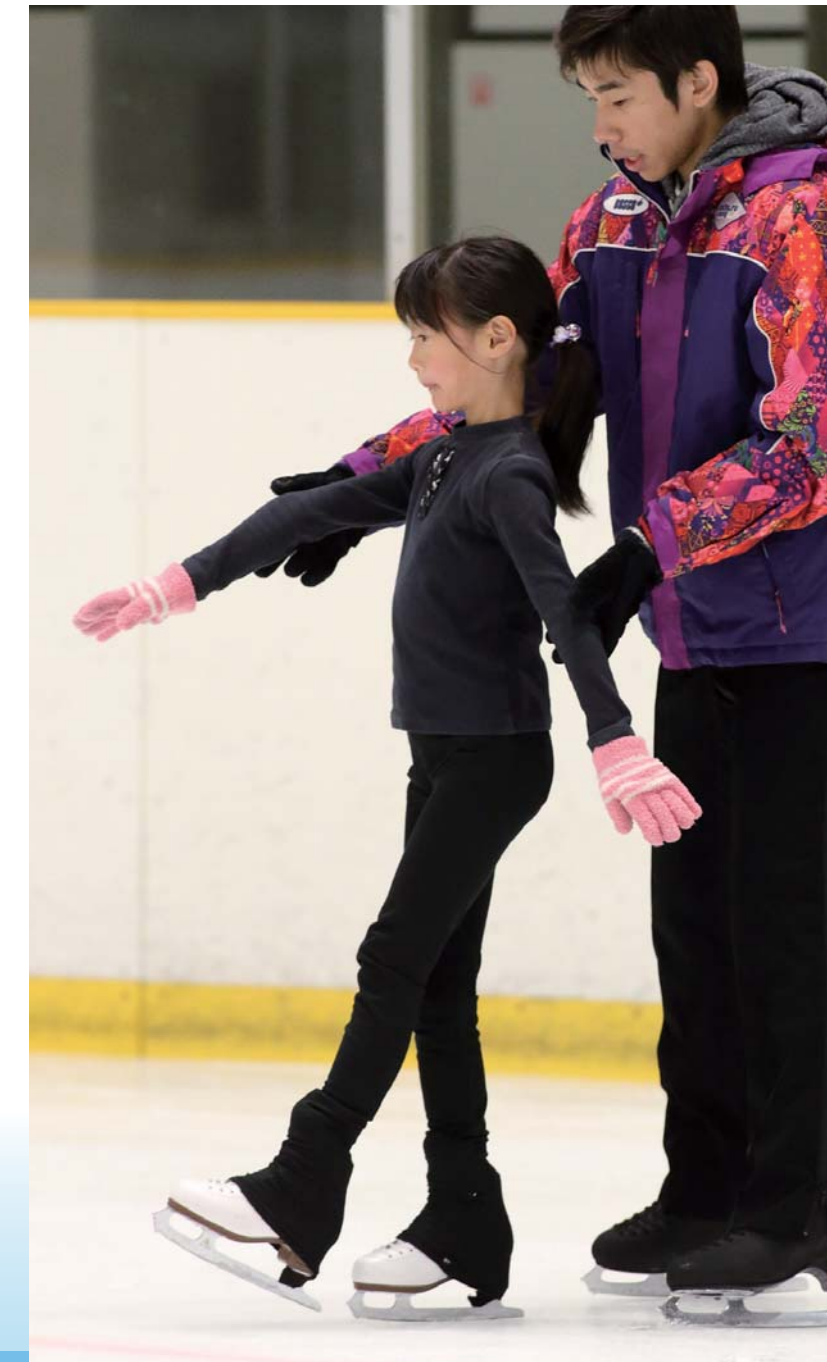
◆宮原さん:体をケアし、不安を打ち消そう
本田さん:フレッシュさを前面に

宮原さんはけがもあって、今シーズンは不安も大きいでしょう。痛みがない時でも、常に疲れをためないとか、なるべく体のケアを考えてほしい。今はけがをしたことで、体のバランスがかなり

変わっていると思います。体のケアを意識し、バランスを整えることで良くなってくると思います。彼女は練習をすごく頑張る選手で、体のケアも一生懸命する選手なので大丈夫でしょう。



● たかつきアイスアリーナで指導している子どもたち



■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]



文理融合で 名店とコラボレート

「大学は美味しい!!」フェアで関大ブランドを発信

●商学部 3年次生 飯隈 菜津美 さん
●化学生命工学部 4年次生 岡島 浩平 さん

新宿高島屋で5月18日から23日に開催された第10回「大学は美味しい!!」フェアに、商学部と化学生命工学部がタッグを組んで参加した。特別企画「3大学が話題の店とコラボレート」の一大学として「ミシュランガイド」に名を連ねる大阪の「鮎千陽」と共に「生フルーツ黒酢×鮎」を企画。商学部の「マーケティング力」と化学生命工学部の「研究力」による「文理融合」で、関大ブランドを全国に発信した。

飯隈 菜津美—いまくま なつみ

■1997年大阪府枚方市生まれ。四天王寺高等学校卒業。商学部3年次生。西岡健一教授のゼミに所属し、各種マーケティングを研究。趣味は音楽鑑賞とサーフィン、抹茶アイス作り。

岡島 浩平—おかじま こうへい

■1995年大阪府交野市生まれ。初芝富田高等学校卒業。化学生命工学部4年次生。老川典夫教授の研究室に所属し、酵素工学を研究。趣味はギター。好きな食べ物はラーメンで、関大前の「武双家」がお気に入り。

全国の大学発のブランド食品が一堂に会する「大学は美味しい!!」フェアに、関西大学が文理融合で挑んだ。大阪の名店「鮎千陽」とコラボし、老川典夫教授が研究・開発した「生フルーツ黒酢」を使って「真鯛×みかん酢」「雲丹×ブルーベリー酢」等、斬新なアイデアのにぎり鮎を生み出し話題となった。老川教授の研究室でD-アミノ酸を研究している岡島さんは、「3月末に老川先生から話があり、将来は食品メーカーで商品の開発に携わりたいと思っていたので参加を決めました。主に理系側の意見やアイデアをまとめました」。商学部リーダーとしてフェア初参加の飯隈さんは、「黒酢を使ったお鮎ですが、お鮎の知識も無い状況からのスタートで大変でした。机上の理論をいかに販売現場で反映させるかなど、本当に良い経験になりました」と笑顔で振り返った。

南国の温暖な気候と豊かな自然に恵まれた鹿児島県霧島市福山町。「黒酢の郷」として知られるこの町の福山黒酢株式会社と、老川教授の共同研究により開発されたD-アミノ酸強化黒酢を使用した「生フルーツ黒酢」。肌に良く、食品の旨味にも関与すると言われるD-アミノ酸を豊富に含むこの黒酢で、「鮎千陽」が厳選したネタを更に引き立てることに成功した。フェア中は商学部6人、化学生命工学部5人の計11人が日替りで関大ブースを盛り上げ

た。「私たち商学部は、商品がどのような目線で消費者に見られているのか、どうすればお客さんに足を止めていただけるかを意識しました」と飯隈さん。東京で、まずは関西大学を知ってもらうことがPRの第一歩と考え、商品紹介やキャンパス紹介のPVを制作し、ブースで流した。POP広告では「限定商品」など、より消費者へ響くキャッチコピーを考えた。Twitter、Facebook、InstagramなどのSNS戦略にも着目し、情報拡散に努めた。「SNSではいかに写真映えするかが大事になりますから」と飯隈さん。岡島さんは、「D-アミノ酸とは何か、またその特長と魅力は何かを研究側の視点から伝えました」と言う。

商学部の「マーケティング力」と、化学生命工学部の「研究力」が融合した関大ブースは、「生フルーツ黒酢ピュアミノセット」「みかんソルト」「和neチャージS」などの商品がメディアで取り上げられ、当初の予想を上回る反響を呼んだ。「企業側との進捗状況確認やディレクションなどをする中で、現場ではスピードが要求され、熱量もゼミの授業とは違うことを実感しました。また、普段は接点のない理系の深い専門知識と思考に触れることは新鮮でした。大学の授業、ゼミの活動に全力で取り組み、幅広い知識を身に付けて提案できる力を養っていきたくです。今回のように、知識を持っている人のサポートを得るためにも、手段や方法の選択肢を広げていきたいですね」と飯隈さん。大学院に進学予定の岡島さんは「売場ではじっくり説明できるよう足を止めてもらうのが大変でした。商学部の皆さんは明るく元気な声でお客さんに声を掛けてくれて、アイデアも豊富で、実際に商品を販売するための勉強をしていると実感しました。準備からの3カ月間はあっという間でした。一生懸命に取り組むと時間の流れは速いです。この貴重な経験を生かし、課題を乗り越える力を付けていきたいです」と、研究課題により一層取り組んでいく意欲をみせた。実地経験を糧に、2人は更なる高みを目指している。

消費者と企業の 溝を埋める

アナログな価値を統合し立体的な形にする

●株式会社アイ・キューブ 代表取締役 広野 郁子 さん —文学部 1986年卒業—

女性目線、生活者目線で「消費者と企業の架け橋」を貫く広野さん。徹底した現場主義を掲げ、600人以上の主婦ネットワークを生かしたマーケティングリサーチ会社アイ・キューブは、「IT全盛の現代で、アナログな価値を統合し、立体的な価値を生み出している。



兵庫県芦屋市、街路樹に溶け込むおしゃれな3階建てビルの2階に、広野さん率いるアイ・キューブがある。社会との接点を望む主婦に秘めた可能性を見だして、主婦モニターのネットワークを構築し、「企業と消費者のギャップを埋めるマーケティング」で企業の商品開発に携わっている。これまでジャー炊飯器「本炭釜」(三菱電機)、体温計「けんおんくんMC-670」(オムロンヘルスケア)など、数多くのヒット商品の開発に関わっている。「消費者の意見を伝えるだけでは、ただの不満で終わるリスクがあります。主婦ネットワークから得た消費者の声を翻訳し企業側に伝えて、新たな価値を提案していくのが私達の役目だと思っています」と言う。

「男性と同じ立場の環境に身を置き、経済的に自立できる女性でありなさい」が口癖の母親のもと、広野さんは歩を進めた。子供達の長所を伸ばせる教員を志し、関西大学文学部・教育学科に進学。在学中、オーストリア人哲学者ルドルフ・シュタイナーが提唱した人智学を基盤に教育芸術を實踐し、自由教育の象徴的存在でもある「シュタイナー教育」に出会い卒業論文のテーマに選んだ。「現場を自分の目で確かめたい」という思いで、友人と4人でアポイントも取らずにドイツ・ミュンヘンにあるシュタイナー教育の学校を訪問した。「円の概念を教える際に、算数の授業だけではなく、体育の授業でも『みんなで手をつないだ状態から、みんなで同じ距離を跳んで綺麗な円を作りましょう』と教えてい



広野 郁子—ひろのいくこ

■1963年兵庫県神戸市生まれ。82年兵庫県立長田高等学校卒業。86年関西大学文学部卒業。同年株式会社リクルート入社。出産を機に退社後、消費生活アドバイザーの資格を取得。兵庫県立神戸生活科学センター（現：神戸生活創造センター）、三菱電機株式会社を経て2001年アイ・キューブを設立。趣味はテニス、ホットヨガ、旅行。

ました。シュタイナー教育は本当に立体的な教育で、それを教えるには豊富な経験が求められます。自分が学んできた知識だけでなく、もっと立体的に想像を膨らませて教育につなげていく。今の自分ではダメだと痛感しました。

卒業後、男女同一賃金で女性の躍進を実践していたリクルートに入社。住宅オンラインサービスを担当した際、「マンションの価格変動の情報を消費者は後から知るといことに疑問を感じ、消費者と企業のギャップを埋められる仕事がしたいと意識するようになりました」と広野さん。出産を機に退社後、消費生活アドバイザーの資格を取得。兵庫県立神戸生活科学センターを経て、三菱電機に入社し静岡製作所でマーケティングを担当。日経ヒット商品金賞を受賞した冷蔵庫「切れちゃう冷凍」の開発に携わり、消費者の生の声に耳を傾け、開発現場に届けた。「切れちゃう冷凍の温度は-7℃です。普通は-18℃で、-7℃にすることは開発現場からすると機能の後退を意味します。反対意見もありましたが、社内の女性に声を掛け、技術者・デザイナー含む開発チームと一緒に会議をして双方の意見を交換し、最終的に素晴らしい製品が完成しました」と振り返る。

Create new value

2001年アイ・キューブを設立。子育てなどで家庭に埋もれ

ている優秀な女性のネットワークを生かした消費者の本音レポートは、「自分たちの潜在能力を引き出してくれる」「社員以上にうちの会社を考えてくれている」と企業側から上々の評判を呼んでいる。職場環境の整備にも力を入れ、勤続5年で5日間5万円支給の「555休暇」の他、「自分磨き休暇」「スクールイベント休暇」「バースデー休暇」など、皆が働きやすい環境を目指している。「社長というものは毎日が決断の連続です。リーダーとして大切にしていることは行き先を明確に示し、信念を持って周囲に伝えることですね。この人に付いていけば間違いないと信頼感を抱いてもらえるような人間になりたいです。analogな価値をintegrate(統合)し、cube(3乗)の価値を生み出すことが社名の由来。ドイツで感銘を受けた「立体的」な絵を、広野さんはビジネスの世界で描いている。

研究最前線

比較憲法、南アジア法に関する研究

インド憲法の動態から 国の歩みを追う

法律の視点から南アジア諸国の在り方に迫る

●政策創造学部
浅野 宜之 教授



各国において、裁判官の任命方法は司法の独立にかかわる重要な問題となっている。特にインドでは、司法の独立が憲法の基本構造であることが強調されており、裁判官の任命に関して、長きにわたり、政府と裁判所との間で綱引きが繰り返されてきた。比較憲法、南アジア法を専門とする浅野宜之教授は、インドをはじめアジア諸国の司法制度に焦点を当て、立憲主義についての研究を進めている。

独立国における最長の成文憲法とは

—インド憲法に関心を寄せたきっかけをお聞かせください。
私はカトリックの家庭に育ちましたので、高校時代、将来はイエズス会に入って神父になりたいと思っていました。教会では社会の奉仕活動に関与し、当時、カトリックの「解放の神学」—世界の貧困を見つめ、社会を変えるために神学を生かすという考えに関心がありました。また、通っていた中学・高等学校共にインドとの交流があったため、インドは身近であり、興味のある国でした。
その後はカトリック大学である上智大学に入り、NGO活動に参加。インドやフィリピンの子供たちに奨学金を届けたり、実際に農村部へ足を運んだりしました。法学部では、法哲学や比較法を学びながらも、インドの法律を深く勉強したかったのですが、当時の日本にはそのような場はなく、一度社会に出てから、アジアの法律に詳しい研究者が名古屋大学へ赴任されたのを機に、大学院へ進んで研究に従事することが叶いました。
—インド憲法にはどのような特徴があるのでしょうか？
1950年に施行されたインド憲法は、世界の独立国の憲法の中で最も長い成文憲法の一つです。その条文数は400以上に及び、日本国憲法の約4倍。連邦制であるインドには、州・連邦直轄領



の行政に関するそれぞれ詳細な規定があり、それらの変更にも対応する必要があります。
また、憲法に限らず、インドの法制度は周辺諸国に伝播しています。各国の資料があるわけではないので提示は難しいですが、スリランカやバングラデシュなど、南アジアの国々はインド憲法を参考にしている可能性が大きく、ブータンやネパールには憲法制定の際にインドからアドバイザーが訪れて、考え方や言葉の使い方などに多大な影響を与えています。そのため、インド憲法を比較の中心に据えることは、各国のさまざまな事象を見ていくのに適していると言えます。インド憲法の場合は制定した際の議事録が残っており、それを見れば他国のどの条文を参考にしたのかは一目瞭然なのですが。

裁判所が進んで政治や企業にアプローチする

—日本もインドの司法制度から学べることはありますか？
インドの司法制度では裁判所が一番重要とされ、裁判所は法律の適用や解釈について比較的柔軟に対応しています。最高裁判所や高等裁判所の裁判官は「裁判所は正義を実現する場だ」「政治家をあまり信頼できない分、自分たちがやる」という思いを持っている人が多く、裁判所が積極的に政治や企業に働きかけることが多々あります。その判断や、日本でも起こり得るさまざまな問題がインドで起こった場合、どう対応しているのかなども参考になります。
例えば以前、日本で障害のある方が飛行機に搭乗する際、車椅子を降りて自力でタラップを上らなければならなかったというニュースがありました。20年程前にインドでも同じような問題が起こっており、公益訴訟で裁判となり、裁判所から空港システムの改善命令が出ました。インドでは、貧しい、読み書きができない、手段を知らないなどの理由から自力で訴訟できない場合、第三者が代理で訴えるといった、いわゆる原告適格を緩和させた公益訴訟が認められているのです。

—インドの公益訴訟は、世界各国でも参考にされそうですね。
公益訴訟の対象は現在、環境問題にまで広がっています。例えば、世界遺産として名高いタージ・マハルは大理石でできており、酸性雨による溶解が問題になっています。そこで「建造物が環境被害を受けているということは、周辺に住んでいる人達も被害を受けている」と裁判が起こされ、これをきっかけに、裁判所は周辺工場に一定の規制をかけるよう政府に命令を出しました。国によって対処は違いますが、こうした判例はある程度参考になるでしょう。
他にも、政治家が相反する意見のどちらについても票を失うというような場合、判断を委ねるという形で裁判所を利用することもあります。そうした司法府と政府の関係も注目すべきところで

転機となった憲法第99次改正

—先生は、インド憲法の転機として2014年の憲法第99次改正を分析、研究されています。これはどのような改正だったのですか？
日本では、最高裁判所の裁判官がどのように任命されるのか、あまり知られていませんよね。学生に最高裁長官の名前を尋ねてもほぼ誰も答えられず、その名前が新聞に掲載することもほとんどありません。一方、インドでは、頻繁に最高裁長官の発言や最高裁の決定などがメディアに取り上げられ、裁判官の任命も注目されています。憲法第99次改正はその任命方法を変更するというもの。それまでの約20年間は、最高裁長官と何人かの裁判官から成るコレジウムが候補者を推薦し、大統領が任命する形がとられていましたが、この改正により国家裁判官任命委員会(NJAC)を設けて推薦する形に変わりました。
—改正後、どのようになったのでしょうか？
最高裁長官や裁判官もNJACの構成メンバーに入ってはいますが、司法府が持っていた実質的な任命権限が移譲されたのです。2015年に最高裁は憲法改正とこれに基づく法律についての公益訴訟において、改正は違憲だという判決を下しました。つまり、政府と司法府の意見が対立したのです。違憲となった以上、改正内容をそのまま運用することはできません。しかし、以前のやり方に「ブラックボックスだ」という批判があったのも事実であり、現在はそこを配慮しつつ、これまでのシステムを手直しし、折り合いをつけていく方向に進んでいます。研究の立場からは、その動きを見据えつつ、この判決の位置付けをより明確にしていこうと思っています。



大学院生時代に調査のため訪れた
インド・オディッシャ州の村(1998年)

法律は、その国を知るきっかけの一つ

—関西大学の政策創造学部は今年4月で10周年を迎えました。アジア諸国の法律を学ぶ意義をどのようにお考えですか？
30数年前と比べ、諸外国、特にアジアの法律を学べる場が増えているように思えません。他大学でも中国や韓国についての講義はありますが、他のアジア諸国については研究者も少ない。本学の政策創造学部はアジアだけでもタイ、カンボジア、インド、中国、韓国の法に関する講義を設けており、欧米も合わせ、これだけ多くの国々の法について学べる環境を揃えている大学は日本で唯一と言えるでしょう。
国の在り方を経済や社会、文化の側面から見ることはありますが、法という側面から見ることは多くありません。しかし、憲法はどのような人権をどのような形で保障し、どのように国の運営を進めるのかを示す重要な文書。インドやアジア諸国独自の方法や制度があり、法律を学ぶことはその国や社会の方向性を知る一つのきっかけになります。今の学生は、社会へ出てから仕事や観光などでアジアの国々を訪れる機会が比較的多いはず。法という観点から国を見て、その在り方を複合的に知ることはとても大切です。
—今後の抱負をお聞かせください。
これからも、南アジア諸国の憲法について研究を進めます。トピックはまだたくさんありますが、ゼミではブータンを取り上げています。ブータンは君主制国家であり、憲法も非常に面白い。現代の君主国において王様が存在する意義は何があるわけで、その憲法上の位置付けにも関心があります。国王の存在しないインドをずっと研究してきたので、また別の視点から南アジアの憲法を考察できるでしょう。本学はブータン王立大学と基本協定を締結しているので、交流も進めたいですね。
また、私は8年程前から、日本貿易振興機構(JETRO)のアジア経済研究所の研究班で障害者法の問題を研究しています。昨年、インドでは新しい障害者法が制定されました。今後の重要な課題として、日本はもちろん、他国とも比較しながら、新制度について考察を深めていきます。

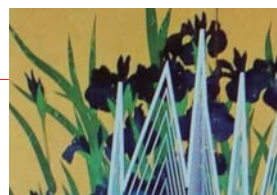
研究最前線

メディア・アート研究

視覚と聴覚が相互に作用する
新しい表現

先端技術を使った情報の見せ方を探る

◎総合情報学部
井浦 崇 准教授



時代の変化に対応した教育を常に提供してきた文理融合の総合情報学部には、さまざまなタイプの教育・研究者がいる。その一人、井浦崇准教授は、視覚と聴覚の相互作用をテーマに、映像と音響を結び付けた独自の表現で国際的にも活躍するアーティストの顔も持つ。作家として、教員として、先端テクノロジーを駆使し、豊臣期大坂図屏風のデジタル展示、拡張現実技術(AR)による村野藤吾設計の旧学舎の再現などのさまざまなプロジェクトでも、その感性と技術を生かし貢献している。



光琳の傑作も、マグマの動きも音響化しアートに

美術作家として作品も発表されていますね。

学生を指導すると同時に、作家として作品制作も行っています。作家としては、視覚と聴覚の相互作用をテーマに、映像と音響の領域を横断する新しい表現を探究する作品を制作してきました。現代の美術は従来の絵画とは違って、作家一人ひとりが独自の表現方法を探るものになっています。その中でも私が研究しているのは、デジタルメディアなどの新しいメディアの表現方法を探究するメディア・アートにあたります。

具体的にどんな作品を作られてきたのですか？

尾形光琳の代表作に、国宝『燕子花図屏風』があります。この作品は金地の背景にカキツバタが並んで描かれたもので、そのリズムミカルなデザインが“音楽的”であると評価されています。これを実際に音楽に変えたらどうなるだろうかと、花の高さを音階として、横方向を時間軸に見立てて再生する映像音楽作品にしました。

これは2015年の展覧会『琳派400年記念 新鋭選抜展』に向けて制作したもので、その後、ミラノ万博日本館の京都ウィークでも展示されました。

他にも、花や葉の広がりや地形など、自然の造形から音楽を作り、映像と合わせた作品などがあります。ミュオグラフィを使った作品にも現在取り組んでいます。



尾形光琳作『燕子花図屏風』の花の配置を音階に見立てた映像音楽作品 (ミラノ万博日本館)

—ミュオグラフィとはどのようなものですか？

ミュオグラフィは、宇宙から降り注ぐ素粒子ミュオンを利用して、山や大きな構造物を透視撮像する技術で、総合情報学部はこの技術の利用で世界をリードする東京大学地震研究所と連携し、「ミュオグラフィアートプロジェクト」を進めています。

その中で私は、鹿児島島の薩摩硫黄島の火山を、数日間にわたって撮影し続けた画像を用いて、マグマの動きの変化を時系列で追いかけて音響化した作品を制作しました。この展示は9月4日から11日までグランフロント大阪のナレッジキャピタルで展示され、たくさんの人に画像では認識しにくい変化を音響で感じていただけたと思っています。

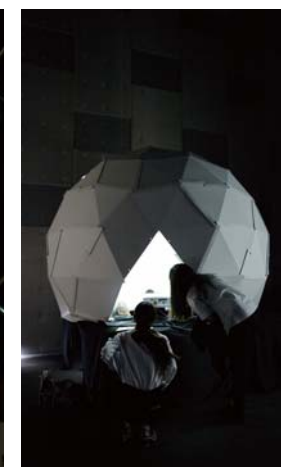
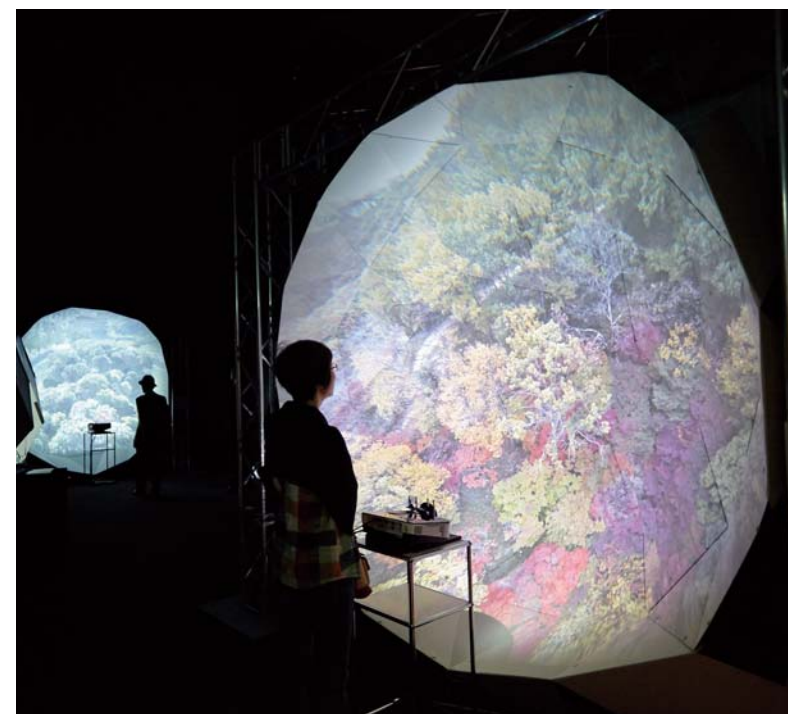
最新機器を利用した映像で歴史、地域を発信する

—音響化だけでなく、新しい映像表現や、映像の見せ方も研究されていますね。



▲豊臣期大坂図屏風 (オーストリア エッゲンベルク城 (世界遺産) 所蔵)

作品というよりも、視覚メディアのデザインというべき取り組みですが、オーストリアで発見された『豊臣期大坂図屏風』のデジタルコンテンツ化に取り組んできました。これまでに大きなモニターでの展示、WEBコンテンツ化、手元のタブレットなどを使い、屏風に描かれた場所の現在の様子を写真で見比べたり、細部を大きく拡大して見ることもできるようにするなど、美術品としての魅力や描かれた内容への理解を深めるための見せ方をいくつか開発してきました。所蔵されている世界遺産エッゲンベルク



◀◀360°カメラ搭載ドローンで撮影した映像をドーム型スクリーンや球体に投影する「360° frontier」

城でも、現物を見ながらタブレットなどを利用して鑑賞を助けられるように、私たちの作ったものを役立てていただこうという話も進んでいます。

また、360°カメラを搭載したドローンを飛ばして、総合情報学部のある高槻市の摂津峡公園、今城塚古墳、このぼりフェスタなどを空撮した映像を制作し、ドーム型スクリーンや球体に投影する「360° frontier」という展示も行いました。

本学の千里山キャンパスにある村野藤吾氏が設計した旧学舎を、ARという拡張現実技術を使って、復元合成するプロジェクトにも関わっています。村野藤吾氏は戦前から戦後にかけて活躍した日本を代表する建築家で、関西大学とは縁が深く、千里山キャンパスの建物を数多く手掛けています。現在はあすかの庭という広場になっている場所にもかつては学舎が建っていました。私たちはその失われた学舎を設計図からCGで立体的に再現し、スマートフォンなどのアプリを使ってあすかの庭を覗くと、その学舎が見えるというものを開発中です。

学外との共同プロジェクトで学生が成長

—教育者としては、どんな指導の仕方をされているのですか？

以前に比べ、ゼミでイベント参加や共同制作研究の機会が増えました。「360° frontier」では、ドローンの操縦、撮影、映像の制作を学生が行ったほか、全天球(360°)映像をバーチャルリアリティで見るためのビューワーを作成し、3Dペンで装飾するワークショップなども、学生が運営しました。

今年は、高槻青年会議所の依頼のもと、地元の上宮天満宮の七夕祭りのイベントで、プロジェクションマッピングを行い、音楽も映像も全部学生が制作しました。

このような機会を通じて、学生達はチームワークや集団の中で個性をどう発揮するか、といったことを試されることになります。そういう経験は学生だからこそ良い形でできるものだと思いますし、失敗も許されます。制作に当たっては、学生がどんなことを

したいか、どんなことができるかアイデアをどんどん出して広げる形でやっています。

—そもそも、メディアアートへの興味は、どこから？

絵を描きたいというのが元々あったのですが、同時に音楽を作るのも好きでした。20年ぐらい前、私がちょうど芸術大学の学生だった頃、それまでは音楽は音楽用、映像は映像用の専門機材が必要だったものが、コンピューター1台でどちらも扱えるようになりました。それでごく自然に、テクノロジーを使って、絵を描くことも音楽を作ることも一緒にやるような作品を作り始めました。

—今後の抱負を教えてください。

作家としては、発表の機会をどんどん作り、作品を通じて、自分が感じた発見や喜びをより多くの人と共有していきたい。自分の作品に興味を持ってくれる人が増え、いろいろなつながりが生まれればいいと思います。

教員としては、自分の技術や感覚を学生の成長に役立てられればと思っています。学術研究を中心とするゼミと違って、作品制作を実際に行い、それを大学の外に向けて発表するというのが一つの学習サイクルになっています。大学の外との接点を持つことやこの日までにこういうものを完成させるとゴールをはっきりしている作業に携わる中から、自分のやりたいことや自分の特性を見つけることができます。学生にはぜひ、そういう場に積極的に飛び込んで、自分を磨いてほしいと思います。私自身も学生と一緒に新しいことにいろいろ挑戦し、学生と一緒に成長していければと考えています。



◎教育後援会が創立70周年記念式典、アイスショーを開催

次世代を担うスケーターが、華麗な演技を披露



関西大学教育後援会は7月2日、創立70周年を祝う記念式典とアイスショーを、たかつきアイスアリーナ(高槻キャンパス)にて挙行了。

教育後援会は、戦後の関西大学の教育環境を良くしたいと願う父母・保護者により、1947(昭和22)年に発足。以来、その規模や活動内容から日本最大級の教育後援会組織となり、教育後援会主催の各種懇談会等への参加者は毎年1万人を超える。

当日は約500人の来賓者が参席。記念事業の一環として開催された「ここに残る“私の関大”写真展」の表彰が行われ、最優秀賞受賞者に賞状と賞品が贈呈されたほか、関西大学体育会アイススケート部名誉顧問で日本スケート連盟会長の橋本聖子氏や、アイススケート部OBの佐藤信夫氏、高橋大輔氏をはじめ、フィギュアスケートのコーチ陣に記念品が贈られた。

続くアイスショーでは、関西大学に縁のあるフィギュアスケーターが約2時間半にわたり演技を披露。エキシビジョンでは、今シーズンからシニアデビューの本田真凜さん(高等部1年生)や、



白岩優奈さん(関大KFSC)が高度なジャンプを織り交ぜた迫力ある演技で会場を沸かせ、宮原知子さん(文2)がフルート、バイオリン、ピアノの生演奏をバックに3回転ジャンプを決めるなど圧巻の演技を見せ、観客はその美しい滑りに酔いしれた。

◎教育後援会「巨大災害を考える ―震災復興祈念 特別講演―」

震災の教訓を生かし、今後に備える



●芝井敬司 学長 ●河田恵昭 社会安全研究センター長 ●小山倫史 准教授

8月5日、関西大学教育後援会は、関西大学と校友会との共催により、「巨大災害を考える ―震災復興祈念 特別講演―」をTKP

ガーデンシティネストホテル熊本にて開催した。当日は、「熊本地震の教訓 ―きたる大震災に備えるために―」をテーマに、河田恵昭社会安全研究センター長(くまもと復興・復興有識者会議委員)が、熊本地震の教訓を踏まえ、大災害に備えて今すべきことを提言した。続いて、「熊本城築城と修復の歴史 ―復興に向けた課題―」をテーマに、小山倫史社会安全学部准教授(国土交通省近畿地方整備局 道路防災ドクター)が、熊本城の城郭石垣の築造・修復の歴史をたどるとともに、今後の復興に向けた課題について、過去の戦災や地震による被害状況等にも触れながら講演。約70人の聴講者は皆、熱心に聞き入っていた。

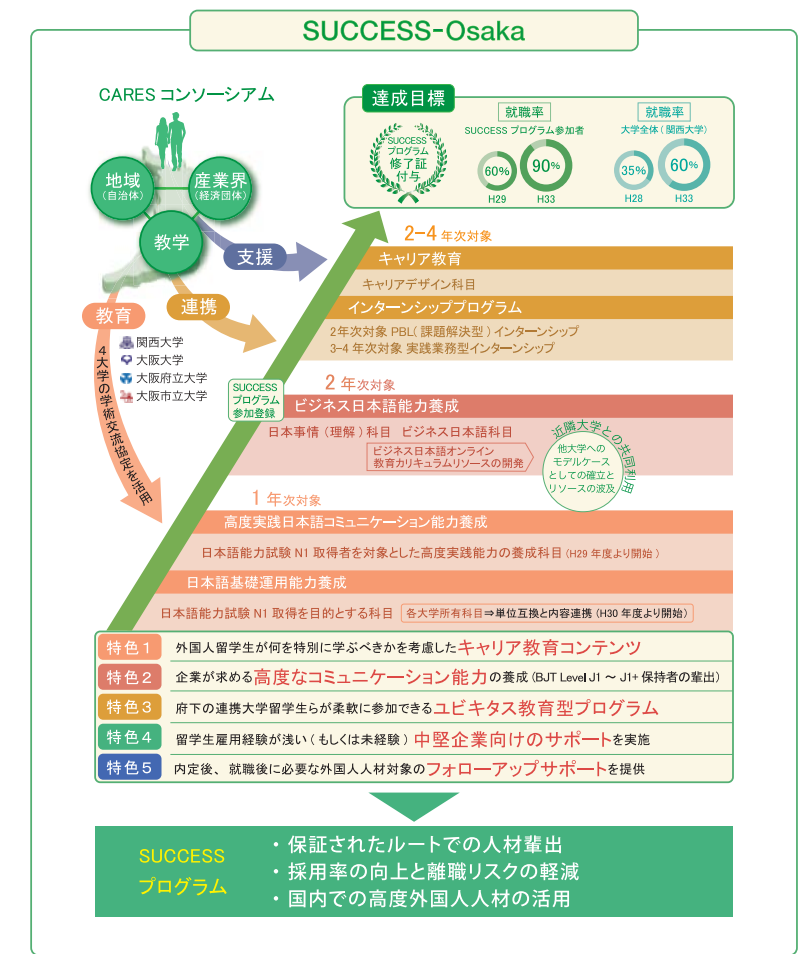
◎文部科学省「留学生就職促進プログラム」

留学生の日本社会での就職を支援する「SUCCESS-Osaka」

文部科学省「留学生就職促進プログラム」に、関西大学の申請事業「SUCCESS-Osaka (CARES コンソーシアムが推進する、留学生のための国内持続型の就職促進の取組)」が採択された。本プログラムは、日本国内でのキャリアを視野に入れる留学生を確実に就職へと導く(成功:SUCCESSへと導く)ことを目的としている。

関西大学は、2012年度に文部科学省「留学生交流拠点整備事業」に採択され、「H.O.M.E.千里交流拠点」を立ち上げ、地域の活性と外国人留学生の受け入れ促進にまい進してきた。また、2015年度からは、文部科学省「住環境・就職支援等留学生の受け入れ環境充実事業」に採択され、「大阪・留学生住環境・就職支援サポートプロジェクト CARES-Osaka」を立ち上げて大阪の留学生増加を促進するとともに、留学生の日本での就職を前提とした定住支援や地域住民との共生に力を入れてきた。

今年度採択された本プログラムでは、学術連携協定および包括連携協定を締結している大阪大学、大阪府立大学、大阪市立大学を含むCARES コンソーシアム参画組織と緊密に連携し、留学生のキャリア教育コンテンツの形成をはじめ、高度なコミュニケーション能力の養成をユビキタス教育型プログラムを実施することで実現する。留学生の受け入れ経験の少ない企業向けの支援も推進し、初年次から卒業後までを視野に入れ、留学生と企業の結び付きを強化していく。



◎海外の学生が、関西大学で学ぶ4週間

Summer School 2017を実施



Summer Schoolは、外国大学等に在籍している大学生を対象として、PBL(Project Based Learning)科目などを含む英語で開講する専門科目を学べる短期受入プログラムである。受講生は、2週間または4週間にわたり、千里山キャンパスで専門科目を集

中的に学ぶことができる。学修時間は各科目45時間で、修了時には成績評価が行われ、単位互換に活用することができる証明書が発行される。

今年の参加者は約60人。PBL科目のフィールド調査では、EXPOCITY、リッツカールトン大阪、道頓堀等に赴き、日本のおもてなし文化の調査等を行うなど、日本文化や社会にリアルに触れることができる内容となっている。

このプログラムには、サポーターとして本学学生が関わり、日本語タンドム(言語交流学習)の相手役や、フィールド調査での留学生達の行動のサポート役を担当した。本学学生にとっても異文化理解の機会を享受できるため、今後の展開にも期待が寄せられている。

■社会貢献・連携事業

◎関西大学なにわ大阪研究センター主催

「『ガラス乾板』に記録された住吉大社の風景」



6月3日から8月下旬まで、なにわ大阪研究センター主催の写真展「『ガラス乾板』に記録された住吉大社の風景」が、住吉大社本宮回廊で開催された。

ガラス乾板とは、明治後半から昭和初期にかけて盛んに使われていた記録媒体で、ガラス板の表面に臭化銀乳剤を塗り、感光させて撮影するもの。

住吉大社には600枚以上のガラス乾板がほぼ未整理のまま残っており、現在、デジタル化作業と分析が進められている。その作業の過程で、1932(昭和7)年に発行の『住吉大社写真帖』に掲載された写真の原板が発見されたことから、住吉大社所蔵のガラス乾板は、昭和初期に撮影されたものが多く含まれることが判明した。

写真展では、整理が終わったものの中から、当時の神事や祭りの様子が分かる作品を紹介。現在は失われてしまった貴重な風景も記録されており、訪れた人は熱心に見入っていた。

期間中の6月24日には、文学部の黒田一充教授と同研究室の学生らによる「住吉大社石燈籠ガイドツアー」も実施。60人の参加者は、総合調査を基に作成されたイラストマップを手に、境内の石燈籠を見て歩いた。



キッズミュージアム2017 子ども向けの 夏休みセミナーを開催

英語絵本を楽しもう!

ひらめき☆ときめきサイエンス・四神と記念写真

水時計作り体験

スポーツ体験コーナー

関西大学では8月2日と3日、夏休みの子供向けに「キッズミュージアム」を千里山キャンパスにて開催した。集まった子供達は、自然豊かなキャンパス内で虫取り網片手に昆虫探しをしたり、博物館内で木工アニマルや本のポップなどの創作体験をしたり、土器・銅鐸パズルや「飛鳥考古楽かるた」などの文化学習に取り組んだ。その他、3Dイリュージョンを折り紙で体験するコーナーや、歌って踊って英語絵本を楽しむ会なども開催され、子供達はそれぞれ興味のある催しに参加し、全力で楽しんでいった。

また、2日には、小学5・6年生を対象に「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」も開催。文学部の米田文孝教授が「漏刻が計る古代の時間～水落遺跡の古代水時計を知ろう～」をテーマに、最新のCG画像や紙芝居を用いて飛鳥時代について解説。水時計作り体験や飛鳥時代の文物を主題にしたカルタ取りもあり、参加した31人の子供達は、最先端の研究に触れる貴重な体験に瞳を輝かせていた。

今年も
3キャンパスで
開催

市民参加型の キャンパス祭で 大盛り上がり!

◎高槻キャンパス



5月28日、総合情報学部祭典実行委員会の企画・運営のもと、高槻キャンパス祭2017が開催された。23回目を迎えた今年のテーマは「楽しすぎるのでご注意ください」。イベントに参加する方に、たくさんの楽しさを伝えたいという思いが込められており、学生によるステージ企画や応援団による演舞、高校生による野球の親善試合、スケート教室など、さまざまな催しが行われた。

また、古賀広志教授による講演「情報を活かす経営」や、研究発表なども行われ、キャンパス一帯は終日大盛況。来場者は約2,600人で、楽しさいっぱいの一日となった。

6月4日、人間健康学部祭典実行委員会を中心に、第7回となる堺キャンパス祭が開催された。今年のテーマは「来たらわかる楽しいやつやん!! in 堺キャンパス」。地域の方々にも世代を越えて楽しんでもらいたいという思いが込められた。模擬店をはじめ、ダンスパフォーマンスや親子で参加できるワークショップ、お化け屋敷など、子供から大人まで楽しめる催しが数多く行われたほか、体力測定や子供達とのスポーツ交流なども開催され、地域社会との連携を推進する人間健康学部らしい内容となった。当日は1,675人の来場があり、笑顔と笑い声の絶えない一日となった。

◎堺キャンパス

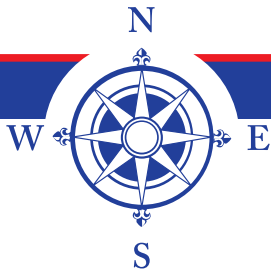


◎高槻ミュージックキャンパス



6月18日、社会安全学部の学生を主体に、高槻市の協力のもと、「学ぼうさい、遊ぼうさい みんなで防災の意識を高めよう!」をテーマに、高槻ミュージックキャンパス祭が開催された。

当日は、吹奏楽部によるコンサートで開幕。「机の上の避難訓練・紙ルービック×ワード」や「作って遊ぼう! 防災グッズ」など、防災を学びや遊びの観点から知るイベントが開催されたほか、模擬店や、高槻市で人気のご当地グルメ・物産展、起震車による地震体験、防犯グッズ作製体験、防災学習ゲーム、地域自治会による炊き出しランチなども行われた。約3,000人ももの来場者があり、会場は大いに賑わった。



卒業生の和田伸也さんが世界パラ陸上競技選手権大会 陸上男子5000mで銅メダルの快挙



銅メダルを獲得した和田さん(写真左)

関西大学卒業生の和田伸也さん(一般財団法人大阪府視覚障害者福祉協会)が、7月14日から23日にロンドンで開催された陸上男子5000m(視覚障害T11)で、見事、銅メダルに輝いた。記録は15分54秒29で自己ベストの15分50秒87の日本記録にはわずかに届かなかったが、安定した走りを見せた。2015年の世界パラ陸上(ドーハ)から2大会連続で同種目銅メダル獲得となり、「メダル獲得という目標を達成してうれしい。100点満点です」と喜びを語った。

和田さんは2000年に社会学部を卒業、2002年に社会学研究科を修了し、在学中は社会福祉学を専攻。2010年のアジアパラ競技大会5000mで4位に入賞し、2014年のアジアパラ競技大会では、800m、1500m、5000mすべての種目で金メダルを獲得し三冠を達成した。

理工学研究科 古屋敷賢人さんが 第66回高分子学会年次大会で優秀ポスター賞を受賞

5月29日から31日、千葉県・幕張メッセで開催された第66回高分子学会年次大会において、古屋敷賢人さん(理工学研究科1年次生)が優秀ポスター賞を受賞した。同大会は、毎年2,200件を超える研究発表が行われる大規模な研究集会。

受賞したテーマは、「スバイタゲースパイキャッチャー反応を利用した血中病原体物質除去用ナビゲーター分子の開発」で、昨年4月より国立循環器病研究センター研究所と共同研究を進めてきた。古屋敷さんは、「2つの機能をもつ分子をつなぎ、それが結合しているかを判断・分析するのが大変だったけれど、努力が報われたようでうれしい。今後は薬剤合成のスキルや研究の手法を生かし、化学系の会社で研究職に就きたい」と思いを語った。



第29回全国大学弓道選抜大会・女子の部で 体育会弓道部が初優勝!

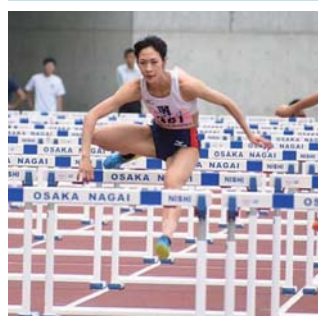
6月24日から25日、第29回全国大学弓道選抜大会が東京都・全日本弓道連盟中央道場・明治神宮武道場至誠館弓道場にて開催され、体育会弓道部女子が待望の初優勝を収めた。



提供：関大スポーツ編集部

準決勝の相手は、昨年の王座決勝で敗れた桜美林大学。2度にわたる同中競射を制し、接戦をものにした。続く決勝も勢いそのままに、大一番で最良の数字を出して1本差で日本大学に勝利。9月のリーグ戦を控え、更なる快進撃に期待が寄せられる。

体育会陸上競技部の中村有希さんが 日本学生陸上競技個人選手権大会の女子100mHで優勝



▲第94回関西学生対校選手権大会(2017年5月)での中村さん(提供：関大スポーツ編集部)

6月9日から11日、神奈川県・Shonan BMWスタジアム平塚で開催された2017日本学生陸上競技個人選手権大会の女子100mハードルにおいて、体育会陸上競技部の中村有希さん(人4)が、悲願の金メダルに輝いた。タイムは13秒48。写真判定の末、0秒006差を制して初の全国タイトルを手にした中村さんは「思ったより高かった」と表彰台からの景色を味わった。

創立130周年記念事業募金等の「寄付者銘板」を設置



8月3日、千里山キャンパス正門横の新関西大学会館南棟に「学校法人関西大学寄付者銘板」が設置された。この銘板は、顕彰制度に基づき、2014年6月から2017年3月末まで実施された「創立130周年記念事業募金」並びに「高額寄付者顕彰銘板」として寄付者に対し、感謝と顕彰の意を表すもの。

当日の完成セレモニーでは除幕式が執り行われ、池内啓三理事長、芝井敬司学長らが謝意を述べ、150周年に向けた関大のビジョンや総合学園としての責務について決意を新たにした。